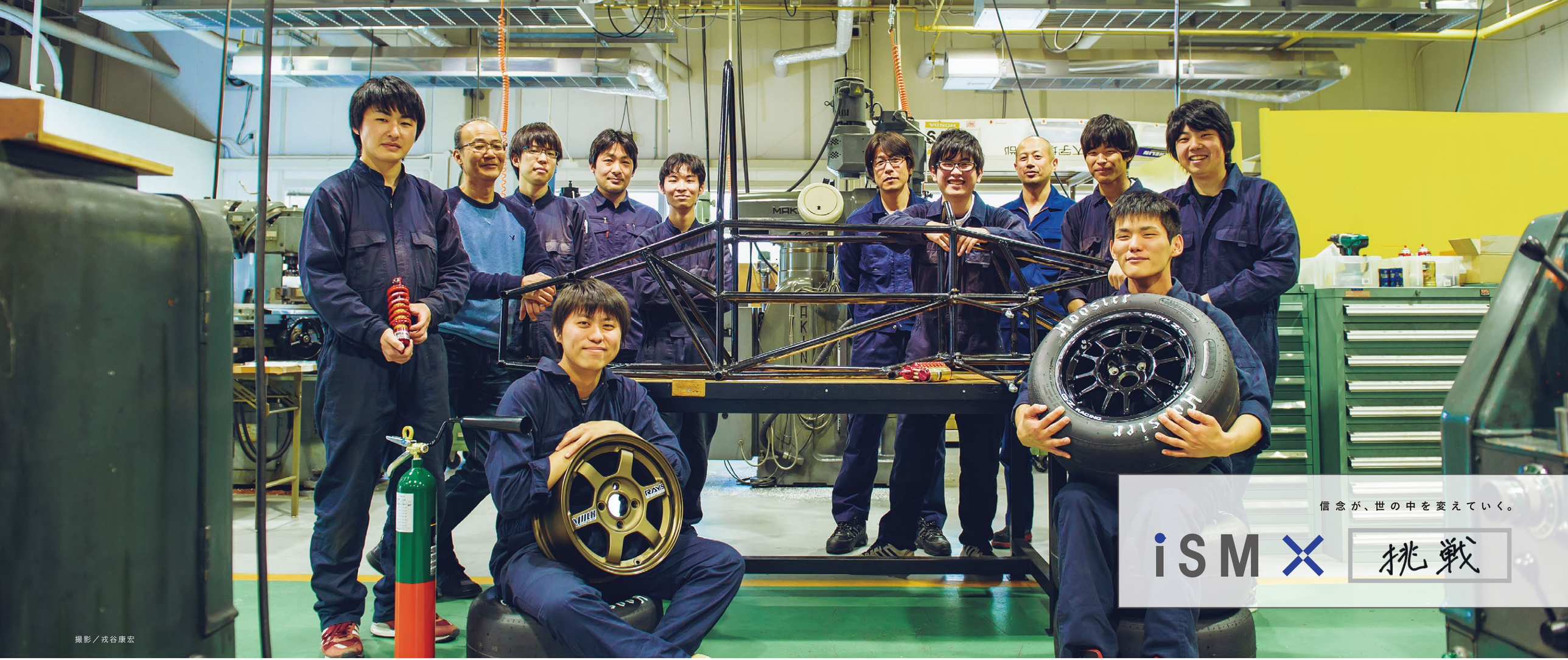


撮影／戎谷康宏

チェッカーフラッグは、諦めない者だけに振られる

”若者のクルマ離れ“は、自動車産業にとって死活問題である。その傾向は、購入予定者のみならず、”ものづくり人材“の減少も意味する。しかし、すべての若者に当てはまるわけではない。実際、訪れた帝京大学宇都宮キャンパスの一角にある実習工場には、”グルマ“に携わる将来“を夢見る学生が集結していた。一昨年発足した『帝京フォーミュラプロジェクト』のメンバーだ。

「自らの手でレーシングマシンをつくりあげることは、自動車のエンジニアをめざして入学した私にとって絶好の機会でした」

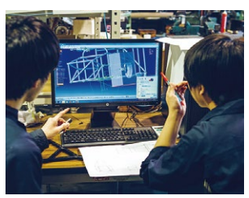
そう語るのは、マシン開発のリーダーを務める佐々木啓太さん(理工学部 機械・精密システム工学科 3年)。国内外から80以上のチームがエントリーする競技会、『全日本学生フォーミュラ大会』への出場が目標という。スピードを競うカーレースを想像したが、聞けば大きな誤解だった。この大会は、”ものづくり“のコンペティション。つまり、速いだけでは表彰台に立てない。

「販売を想定した車両の評価を基準にしているため、設計の優秀さや創意工夫はもちろん、安全性やコストも問われるなど、総合的に審査されます。開発費を抑えるためにもスポンサー探しは重要で、名刺と企画書をもってプレゼンテーションに行くことも少なくありません。今年が初めての参戦なので、何もないゼロからのスタート。いかにメンバーと連携を図り、チームを目標達成へと導くか。リーダーのあり方についても考えさせられる毎日ですが、すべての体験が将来の糧になると確信しています」

技術力、交渉力、マネジメント力……さまざまな能力を育むこのプロジェクトは、ものづくりの現場の縮図といえる。

大会のスポンサーには、自動車およびバイクメーカー各社も名を連ねる。人材創出に対する期待の表れだ。一方で、学生たちを指導する同学部の教員も、エンジニアやメカニックとして活躍した経歴をもつ。ただ、活動はあくまでも”学生の主体性“に委ねているという。ものづくりの本質は、手取り足取りの指導だけではわからない。そう熟知しているからだ。このプロジェクトの目的は、工学的教育の発展に留まらず、人材育成を通したニッポンのものづくりへの貢献にある。

大会は9月に開催されるが、開発は当初の計画から遅れている。前途は多難だが、メンバー全員に刻まれたiSM(イズム)がある。『挑戦とは、諦めないこと』。晴れてチェッカーフラッグをくぐったとき、ものづくりの喜びは何倍にも膨んで若者たちを包み込むだろう。



活動拠点は、理工学部が誇る実習工場。シャシ班、パワトレ班、電装班、ボディ班に分かれて開発を進める学生たち。設計では最新の3DCADシステムを使いこなし、フレーム溶接をはじめとした全工程の作業を自ら手掛ける。

帝京大学
TEIKYO
本部広報課 TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1 http://www.teikyo-u.ac.jp/